

平成 25 年度 第 2 回三重県文化審議会 議事概要

日 時：平成 25 年 11 月 6 日（水） 午後 3 時から午後 5 時

場 所：六華苑

出席者：委員 12 名（秋吉委員、浅田委員、稲垣委員、河上委員、岸川委員、田村委員、千種委員、豊田委員、中村委員、速水委員、山下委員、吉田委員）

（知事あいさつ）

- ・ 先般、文化勲章を受章された万葉集研究家の中西進さんは「東海道中膝栗毛」について、江戸の方が生活水準が高かったであろうにも関わらず、人びとが上方をめざしたのは、心の充足を求めたためであろうし、心の充足が文化の中心であるという意味のことをおっしゃっている。
- ・ また、万葉集については「混とんとして自由」とし、そのような万葉集の有する体質のため、自由な心を持っていない人が読んでも正体が表れない、固定観念の強い人が読んでもだめだという意味のことをおっしゃっている。
- ・ 三重県民の皆さんが「混とんとして自由」な気持ちを持ちながら、自分たちの文化を保持し、発信していく、あるいは、三重県外の皆さんに心の充足、文化の中心を感じていただけるようなみえの文化でありたいと考えている。皆さんの忌憚のないご意見をいただきながら、よりよい方針にしていきたいのでよろしく願いしたい。

資料 1（「新しいみえの文化振興方針（仮称）」骨子（たたき台）について）

（委員）

- ・ 県民意識調査の結果をみると、県民の皆さんは指導者の「養成」を求めている。方針骨子（たたき台）の中にも、指導者、トップを育てるとあるが、「新しいみえの文化」となっているからには大学との協賛あるいは国との連携という形で、今後、具体的に進めていく必要があるのではないかと。ただ、養成は時間がかかるので、指導者の派遣を受け入れるなどわかりやすい形で対応することも考えられる。

（委員）

- ・ とすればこういう文章は流れてしまう。指導者とはどういうものなのか、例えば、プロ（玄人）というように明確に定義しておいた方がいい。

（委員）

- ・ 国の文化政策の動向について、劇場法のこと書かれているが、同法に基づく指針において、設置者と運営者が明確な方針のもと、専門人材の育成を進めていくことが位置づけられている。もう少しその辺を書き込んでどうか。従来、劇場などの文化施設には根拠法がなく、博物館法のもと学芸員が国家資格であるのに

対し、文化施設については技術や知識のある専門家でなくても就職できたことが問題であったと思う。演劇やオーケストラでも地方の公演では手を抜かれると言われたりするが、公立文化施設側にプロがいれば、きちんと要求することができる。

(委員)

- ・ 行政マンをどのように育てていくのかという点にも触れた方が望ましいのではないか。職員が異動することでスタンスが変わってしまい、それまで積み上げてきたものがなくなってしまうということがよくある。

(委員)

- ・ 民間企業にとって一番大事なものは組織と人である。外部から講師を呼んだりして、徹底的に社員を教育する。オールマイティは難しいが、それぞれの分野の専門家は自ら育てるしかない。三重県らしさを出すということで、県独自で人材育成に取り組んでいくべきではないか。大きなホールの運営は専門的な技術や知識が必要で大変難しいが、県立の文化施設が先頭を切って取り組むことを期待する。

(委員)

- ・ 人づくりや組織づくりはアクションプランの段階で整理すべき課題だと思う。それを方針の中に位置づけるのか、分けて整理するのかということだが、分けて考えるべきではないか。

(副会長)

- ・ 人材育成については、文化を担うプロと、それを支えるマネジメントのプロの双方が必要であり、どちらが欠けてもいけない。また、前回の検討部会で委員からご提案があったが、三重県ゆかりのプロ集団が汗を流して活動していただき、そこに住民も一緒になって取り組むという形が望ましいのではないか。

(委員)

- ・ 県民意識調査の結果をみると、県民の皆さんは、コンサートや演劇を鑑賞することで文化の充足を感じている。一方で、方針骨子(たたき台)では、日本の信仰を土台にした古代からの文化を三重県の独自性として考えると書かれており、バラバラ感がある。それらを融合して三重県独自の文化を捉えるにはどうしたらいいのか。

(委員)

- ・ 古いもの、変わってはいけないものと、それをベースに変わっていくものがあり、矛盾はしていないと思う。

(委員)

- ・ いま循環型社会への転換など新しい価値観が出てきているが、さすがは三重県と言われるような新しい世界観・ビジョンを示せたらいいと思う。三重県では県外からの活力を入れていくことが大事。「信仰」を一番に持つてくることは、なかなか難しいかもしれないが、方針を読んだ若い人たちが奮い立つようなものが提示できたらいい。

(委員)

- ・ 私は長年ヒットを追い続けてきたが、ヒットには短期・中期・長期のものがある。伊勢はいわば長期のヒットだと思うが、この方針では短期・中期のヒットを狙わないとダイナミズムが出ないのではないか。

(委員)

- ・ 方針骨子(たたき台)の中で、伊勢と熊野を本県のオリジナリティであり、アイデンティティの源泉であると位置づけたのはよい。今年は、全国から1,000万人以上の方々がお伊勢参りをする。今こそ三重の文化を発信するのだという気概を示すことが必要ではないか。県外から偉い方が来て素晴らしいものを鑑賞するというのもいいが、そろそろ三重県民が自ら創り出していくべき時期ではないか。

(副会長)

- ・ お伊勢参りには世俗的なものがいっぱい伴っていたから、人びとを引き付けたのではないか。「世俗的なもの」と「神聖なもの」を組み合わせることが大事である。

(会長)

- ・ 伊勢と熊野の歴史や信仰のことだけをあげて終わってしまっでは意味がない。伊勢と熊野にはいずれにも「循環」の発想がある。「信仰」という切り口ではなく、循環の思想を取り入れることはできないか。

資料2(施策の具体的な展開のあり方について)

(委員)

- ・ 方向性1(トップを伸ばす)の文章は抽象的である。数値目標ではなく、定性的なものでいいので到達点を示すべきではないか。これではあまり元気が出ない。

(委員)

- ・ 三重県にゆかりのあるアーティストはいるが、県から離れていて三重県で発表する機会がない。県のために何かしたいという人はいるので、この機会にその力を合わせて発信力を高め、もっと関心をもってもらう。それが次世代を育てることにもつながるのではないか。

(委員)

- ・ 方向性1(トップを伸ばす)について、誰がトップを見抜くのかという課題があると思う。最近、日展の問題が報道されたが、既存の文化団体の価値観がいいのかどうか。また、方向性2(次代を育てる)については、初めに小さな子に目を向けて育てていくことが大事ではないか。なお、方向性1と方向性2は内容的には合体してもいいかもしれない。

(副会長)

- ・ プロ、トップを育てるためにはソフト面の指導と合わせて、財政的な支援も必要である。大きなイノベーションや科学的な発見のためには、ある程度タネをまかないといけない。そして芽が出てきたら目利きをして支援するというシステムがないとなかなかトップは育てられない。

(委員)

- ・ 行政においても指導者の育成は大事だと考えている。地方には指導者を求めるニーズがある。例えば、総務省では人材ネットなどの仕組みを作っているが、わざわざ遠方から呼ぶわけにもいけないので、やはり地域で育てていかなければならない。三重県でも人材登録のようなことを考えてみてはどうか。また、図書館の機能は非常に有効だと考えており、生涯学習も含めて教育面で図書館はもう少し大事にすべきだと思う。

(委員)

- ・ ニューヨークは金融の街であると同時にアートの街としても名高い。それはアーティスト基金によるところが大きい。アーティストに生活のための職業を紹介しながら、週何十時間以上芸術活動を行うという条件で支援している。ある意味では、今やパリよりもニューヨークの方がアーティストのレベルが高いとも言われている。三重県は門戸広く、差別することなく日本中から人びとを受け入れてきた県であり、熊野には行政に構築されない部分までも包括してエネルギーに変えてきた歴史がある。指導者やトップレベルのアーティストの育成について、何か思い切ったことをなされるのも一つの手ではないか。

(委員)

- ・ 施策の方向性については、総花的・網羅的でダイナミズムがないのではないか。極端な言い方をすれば、トップを伸ばせば、方向性2(次代を育てる)や方向性3(磨いて伝える)や方向性4(拠点をつなぐ)はついてくるもの。もっと大胆な表現があってもいいのではないか。

(委員)

- ・ それぞれの施策の方向性は具体的にどういうことなのか。ホームページ「三重の文化」をみると、県はさまざまな助成金や賞を出したり、文化芸術祭（県展など）を開催したりしている。かつて岡田文化財団が助成して、全国優勝した子どもたちの音楽フェスティバルを開催したことがあり、その模様をDVDにしたり、三重TVで放映してもらったりした。毎年全国レベルで活躍している子どもたちがいるが、そういう情報がなかなか出てこない。そのような子どもたちの活躍を称えたり、伝えたりする取組などを施策の中で具体的に表現してはどうか。

(副会長)

- ・ 県で世界をリードするような発表会を開催してはどうか。全国大会を開催すれば、三重県がスタンダードになりうるのではないかな。

(委員)

- ・ 伊勢と熊野は素晴らしいが、おんぶに抱っこではなく、そのような資源を活用して何をするのが大事ではないかな。
- ・ これからの行政にとっては、子どもたちに真に豊かな文化環境を提供することが一番重要である。交通事故者より自殺者が多い現状をふまえ、税金を使って文化行政を行うならば、公益性をしっかりと考えて取り組むべきである。

(委員)

- ・ 三重県の特長は何かと考えた場合、人が交流することにより、経済が豊かになったことが挙げられるのではないかな。「楽しい」を超えて、経済的な活力が生み出された。方向性5（かけ合せて生み出す）や方向性6（効果的に発信する）に「経済」というキーワードを入れてもいいのではないかな。

(委員)

- ・ 観光振興と文化財保護には垣根がある。県や市町も含めて何とか垣根を取っ払っていくことが大事ではないかな。
- ・ 裏千家のお茶は伊勢商人が支えたが、それは伊勢商人の経済が悪化していく頃のことであった。なぜ、経済状態がよくないのに支えることができたかということ、それまで十分にお金を使って見る目を養ってきたからである。それが伊勢商人の文化力であったと思う。そういう意味でトップとは見る目を持った人であるかもしれない。

(委員)

- ・ 方向性6（効果的に発信する）について、三重県の文化で最も全国に発信されたのは伊勢音頭ではないかな。全国津々浦々の盆踊りはほとんどが伊勢音頭である。

お伊勢参りにきた方たちが形にならないお土産として伊勢の文化を持って帰られた。今、たくさんの方が伊勢に来られているので、何か三重の文化を持って帰ってもらいたい機会ではないか。

(委員)

- ・ 多気町ではオンリーワン・ナンバーワンをめざしているのではなく、ビジネス・モデルをめざしている。どんどん真似をしてもらって仲間を増やし、ネットワークを作ってみんなで元気になる。今後とも学校、企業などと協働して、一流のもつ熱い思いやノウハウをまちづくりに活かしていきたいと考えている。三重県でも何かモデルになるような取組ができればいいのではないか。

(委員)

- ・ 審議事項1については、トップを育てるということが議論の中心だったと思うが、県として文化を担うプロを育成するのか、県内外のプロに手伝ってもらうのか、あるいは、年間に日本の10人に1人が訪れるという三重県で、文化施設を活用してどのように交流してもらうのか、ということが課題だと思う。
- ・ 審議事項2については、ニューヨークの文化政策など、他国の成功している事例も勉強して、大胆な文化振興策を打ち出し、全国に向けて発信してはどうか、あるいは、日本全体が元気がない中で、他県に先駆けて子どもたちに文化にふれ親しむ機会を提供してはどうか、という意見があったと思う。

(委員)

- ・ 他県の人には伊勢や熊野が三重県にあることを知らないのではないか。その辺も考えて、やはり移ろいやすいものであっても、何かヒットを作り出すことが必要ではないか。

(委員)

- ・ ブロードウェイのライオン・キングは、日本の文化や東南アジアの文化をうまく利用している。そういうものを三重県から発信していくことが大事ではないか。どこかに「新しいみえの文化」と書かれていたが、それをどのように創っていくのか、今一度、みえの文化そのものを再発見することも必要ではないか。

(会長)

- ・ 方針骨子(たたき台)は少し長いので思い切って絞り込んでどうか。透けて見えるぐらいが文化ではないか。もう少し短くポイントをついた文章にした方がよい。また、施策の方向性を見出しなどは、言葉遊びではなく、もっと素直に書くことも必要ではないか。

(知事コメント)

- ・ 本日も刺激的なご意見をいただいたが、ポイントをまとめれば、まず、方針骨子（たたき台）の前半は、例えば「循環」をキーワードにして、何か新しい世界観を、骨のある、夢のある形で書く。そして後半は、ダイナミズムを感じられるようクリアカットに、具体的に書く。
- ・ 人材育成については、指導者の定義をしっかりとした上でもう少し厚みを持たせる。
- ・ なお、この方針のプレーヤーは県民の皆さん全体であるが、県が取り組むべき施策については税金投入の大義が立つよう意識して実施する。
- ・ また、今ある三重県の文化の棚卸しが必要とのご意見もいただいた。
- ・ 引き続き、ご審議のほどよろしくお願いしたい。